

鈴木佑治先生の二十三回忌が来年です。先生は約九ヶ月入院されていました。病床では、ひたすら教壇の想を練っておいででした。退院後の遊行の計画まで立てておられました。その間に自記された記録の中で、教式について次のような注意を書いておられます。

第一次指導の「二とく」では、生のままの叙述面で問答してはならぬ。印象の強い処の話し合いだから叙述面が生のまま飛び出す道理はない。いついかなる場合でも頭を通して考えさせねば、馬鹿らしくて勉強がいやになる。叙述面の取扱いは「一よむ」で終った筈。

「生のままの叙述面で問答」とは、どういうことを指しておられるのでしょうか。二つあるようです。一つは、極めて簡単に思い、叙述の順序通りに問答する授業です。もう一つは、印象の強い所を話し合う「ひびき」の取扱いが不充分の授業です。ふと浮かんだのは、鈴木先生が、あの教壇は「ひびき」の扱いが抜けていると言われたことからです。そこで、芦田先生のご教壇「三日月の影」「探幽と松平伊豆」、鈴木先生のご教壇「子やぎ」（昭和四二年三月）「詩の味わい方」（昭和四三年四月）の第一次指導二とくを読みました。四つのご教壇に共通していることの第一は、その文章の大事な一語（第三層）の横顔をさらっとみせておられる処です。第二は、大事な一語へ向かう進み方、一語の理会を容易にする種（以上を第二層と言うのでしょうか）などを説いておられる処です。それで、大変ざっとしたお扱いです。

第一次指導の二とくについて、芦田先生は「教式と教壇」にこう書かれています。「本質は理会せしむる作業である。読み得たもの、聴き得たもの、経験している事等を集めて学習の基礎を整える。多く補説を要しない。六・七分でまとめる。子供の自解を利用して、急所を説いて、他はうっちゃり、子供に委せる。自己の生活中に存在することを集めて、理解の料とする。空な広野に地形を始める事と考えればよい。」

鈴木先生は、「国語科指導の単純形態」の中に書かれています。「題目は文章の象徴だから、文章の中に楽に入れる糸口。文の輪郭を示してくれる。読後感の取扱い（二とくのこと）は、雑然と入っている感想を秩序立ててやること。すると、今まで考えたことを考え直す手懸りになる。又、これから深く考えていく助けとなる。」

子供達は教師の導きによって、目標が分かり、目標への進み方を感じ取り、一歩々々の踏み方に安心感を持ってくるから、自分から考えようとしてきます。このような姿が、自立心や創造性を育てる基礎となるのではないのでしょうか。

芦田先生、鈴木先生のご著書、各教壇筆録を読んで、どうかご自身の研究をお進め下さい。

平成元年 初夏

いずみ会会長 山 本 忠 壮

（「教式と教壇」は「芦田恵之助先生選集」に、後は「教壇記録と講話」に載っています。「詩の味わい方」は除く。）